

◆荒井良明 選

《滑稽って何？ 前回とは別の切り口で考える》

前回の「私が選んだ滑稽俳句」では次のように申しました。〈何が人を面白がらせ、おかしがらせるのでしょうか。具体例で見ていきたいと思います。〉

前回に続いて、今回は違う切り口で考えたいと思います。

《音が聞こえてくる》

| | |
|---------------|-------|
| 冬麗の箆筒の中も海の音 | 友岡子郷 |
| 冬深し柱の中の濤の音 | 長谷川權 |
| 春の暮ときどき柱も呻きつつ | 河原枇杷男 |
| 水着洗ふ洗濯機から波の音 | 良明 |

箆筒の中から、柱の中から、音が聞こえてくる。柱のうめき声が聞こえる。こういうものも滑稽俳句のジャンルにいれてもいいかな？ イイとも！

三句目では柱が呻いています。これは前回も取り上げた「擬人化」＝「人間でないものを人間になぞらえて表現すること。」（大辞林第三版）です。

〈「擬人化」はくだらない。「擬人化」なんて俳句じゃないという俳人もおり、著書に、そう明記している方もいます。〉というお便りをいただきました。

まあ、そうお考えになるのは自由ですが、そういう迷妄の言を初心者向けの本にお書きになるのはカンベンしてほしいと思います。それを信じた初心者は、俳人になる前に廃人になってしまいます。

やれ打つな蠅が手をする足をする 小林一茶

これを「擬人化だ！」と言って俳句と認めないとしたら、明らかにヘンですよ。

[私の耳は貝の殻 海の響きを懐かしむ (ジャン・コクトー) 訳:堀口大學]。七五七五で堀口大學が訳出したこれは、自由律の（あるいは破調の）俳句といってもいいように思います。詩を感じさせますね。 俳句は十七音の「詩」ですから、「詩」の表現技法のひとつに「擬人化」がある以上、俳句にも「擬人化」が使えるのは当然です。

前回、「擬人化」の例句としてお示しした「冷蔵庫冷やす冷やすと武者震ひ（良明）」については、〈冷蔵庫の震えを詠んだ人は、今まで誰もいないと思います。〉というお便りをいただきました。もしそうであるならば作者としては非常にうれしく思います。オリジナリティがあるということですから。

人とは違うオリジナルな擬人化を是非、俳句にしてください。

《動物の顔・動作等を描くことからくる滑稽さ》

生真面目な貌の目白と思ひけり 平石和美
叱られて目をつぶる猫春隣 久保田万太郎
蝶の舌ゼンマイに似る暑さかな 芥川龍之介
蝶ひらり猫の一撃かはしけり 良明

「蝶ひらり」の句は、前回「ユーモアとペーソス」の例句としても挙げた句です。

《人間観察と人間描写が生む滑稽さ》

じんとくる手紙をくれたろくでなし 時実新子
水仙を見ては綺麗な嘘をつく 田原正彦
性格が八百屋お七でシクラメン 京極杞陽

《因果関係（みたいなもの）の面白さ》

ちるさくら海あをければ海へちる 高屋窓秋
ひなげしを購(か)えば百日愛される 大西泰世

中学生の女の子に言えば信じそうなフレーズですが、実際の因果関係はナイ！（というか不明）。でも俳句としたら、なんかイイ。思わず笑ってしまいそう。

この樹登らば鬼女となるべし夕紅葉 三橋鷹女

「紅葉が夕日に映（は）えていて一段とその艶やかさを加えている。その紅葉している樹に登ったら自分も鬼女になってしまうだろう。女の自分でさえ普通ではいられず、その紅葉の樹に登って鬼にでもなるのではと思うほどの美しさである」。（まるで試験前の高校生の質問に答えた、Y A H O O知恵袋のベス

ト・アンサーのような) 解釈はさておき、この句における「因果関係 (みたいなもの) の面白さ」を私は味わいたいと思います。(鷹女については、三宅やよいの近著『鷹女への旅』は名著です。ご一覽あれ)。

《漢字を使って滑稽さを出す》

串の字は象形文字よおでん食ぶ 八木健

母の日や海の中には母います 良明

伊勢といふ字のさながらに飾海老 鷹羽狩行

壽の字は紅梅の薬 (しべ) のさま 野澤節子

啓蟄に引く虫偏の字のゐるはゐるは 上田五千石

《無生物の擬人化が生むおかしさ》

全力で立つ空瓶に薔薇の花 五島高資

噴水の一本つつの自己主張 友田美子

こうして見てみると、名句と言われる句の中にも滑稽 (諧謔) を内蔵するものが多いとわかります。

三橋鷹女、上田五千石、鷹羽狩行、長谷川權というような錚錚たる俳人も、意外に滑稽な句を作っていたらっしゃる。

(文中敬称略)